文学的創造と「子供がぶたれる」幻想
――日本現代文学・サブカルチャーにおける幻想・倒錯・セクシュアリティの領域
村田智子

本論は、文学的創造のひとつの源泉として、これまで十分指摘されてこなかった「子どもがぶたれる」幻想に着目し、特に現代日本文学を素材として、フロイトの精神分析理論を参照しながら、その幻想と文学的創造の関係を考察することを目的とする。「子どもがぶたれる」幻想とはフロイトが 1919 年に発表した女性の幻想の一類型であり、「少年が男にぶたれる」というサド=マゾヒズム的幻想を指す。その後も臨床の領域でたびたび、この典型のもつ意義は注目されてきた。本論では、この幻想の普遍性が、女性の創作活動と深い関連を持つことを指摘し、さまざまな表現の読解を通じて、その機微を明らかにする。

第 1 部（第 1 章・第 2 章）:「子供がぶたれる」と女性の文学的創出

まず第 1 部では、女性による男性同性愛の表現を、フロイトが見出した「子供がぶたれる」幻想の作品化であるとみなして読むことを試みた。

第 1 章では、「ヤオイ」（「ボーイズラブ」）と呼ばれる小説・漫画群を取り上げた。近年注目される現代サブカルチャーの一領野であるが、そこに多数見られる男性同士のサド＝マゾヒズム的関係を女性が楽しむというその構造は、フロイトの注目した女性の「子供がぶたれる」幻想の構図そのままである。この幻想の前段階に父との関係におけるマゾヒズム的幻想を想定したフロイトの考察と、当事者の女性たちの語りを参照することで、その幻想のもつ快のメカニズムを、女性の社会的・身体的状況からいったん撤退した上で、幻想中の被虐的少年像の同一化により受動性を能動的に選択できる快であると考え、またそれが、能動的に関係性を創る主体になる悦びに通じていると考えた。さらに、幻想の作品化を論じたアンナ・フロイトの事例により、受動性を能動的に引き受ける幻想の構造そのものに創作契機が孕まれていることが示唆された。

第 2 章ではその具体例として、少年愛の幻想と「父」の像の関係を明言している作家・森茉莉を取り上げた。少年愛を描いた小説群と、自身の父との関係を反映させた父娘小説を、特に経済・金銭という観点から比較した。いずれも、特権的な対の世界が年長の男／父の庇護により護られていること、「生殖」のない世界であること、という共通点をもつが、少年愛小説に見られるサド＝マゾヒズムは父娘小説には見られない。ここで本論では「金銭」という要素に注目してこの対比を考察し、少年愛小説の少年たちは、男に経済的な負い目を負っており、これがフロイトのいう「罪の意識」に当たり、作品にサド＝マゾヒズムに通じる不安定な色彩を与えていると考えた。茉莉が少年愛小説を書いた時期は、彼女が金銭的に父の庇護から脱して作家として立つ時期であった。作品にはその姿勢が反映されていると同時に、茉莉にとって男性同士の関係性を創造する悦びは、偉大な父の創造の力を我が物にする過程でもあったと考えた。以上、第 1 部では、フロイトの指摘した、幻

想の中でぶたれる少年への同一化によるマゾヒズム的快のみならず、その際の能動的受動性が快の源となっており、かつそれが、創造性に結びついていることを示した。

第 2 部（第 3 章・第 4 章）：少年愛とマゾヒズム

第 3 章では、少年愛幻想におけるマゾヒズムを「死」との関連で論じた人物として、男性作家である稲垣足穂の少年愛論を考察した。足穂はフロイトの幼児期の性についての理論を摂取しながら、少年愛を「A 感覚」という抽象化された肛門感覚を核として論じた。そこでは、少年愛におけるマゾヒズムが、受動性の究極としての「死」に向かうものとして理論化され、生殖性や身体性の忌避、単性生殖性を介して創造性へ結びつけられる。この理論を足穂のジェンダー観との関係から吟味し、この作家が、異性愛に比して単為生殖を優位とする体系を作り上げることでジェンダー秩序を撹乱する側面をもつ一方で、創造性とマゾヒズムを結び付けるとき、それを男性性に引き寄せ、女性のマゾヒズムは生物学的自然へ吸収されるとしていることを指摘した。

これに対し、男性のそれとも異なり、生物学的自然にも回収されない独自の形の女性のマゾヒズムが表れていたのが「子供がぶたれる」幻想であるのでないかという問いを手掛かりに、第 4 章ではフロイトのマゾヒズム論を整理し、1924 年の「女性的マゾヒズム」という概念との比較から、「子供がぶたれる」幻想の特異性を再確認した。「女性的マゾヒズム」とは、「女性に特徴的な状況」に身を置く志向を表すものであるが、「子供がぶたれる」では、女性が「女性に特徴的な状況」から性別を変えることで一旦撤退したうえで、自ら誂えた「女性に特徴的な状況」に少年として身を置き直すという構造が見られた。フロイトはここで、生物学的自然に吸収されないような女性のマゾヒズムの形を明らかにし、またマゾヒズムの戦略的側面をも示唆していたといえる。

以上、第 2 部では、マゾヒズムが脱身体的な「死」への過程として比較的明快に位置づけられていた足穂の論を手掛かりとして、「子供がぶたれる」に表れた女性のマゾヒズムを再考し、それが「女性にとっての女性的マゾヒズム」というねじれた課題のためより複雑でかつ戦略な形を取っていると考えた。

第 3 部（第 5 章・第 6 章）：女性性の戦略的表現

第 3 部では、「女性にとっての女性的マゾヒズム」という、課題に、より戦略的にアプローチした作家として、倉橋由美子・河野多惠子という二人の女性作家の表現を見た。

第 5 章では、倉橋由美子の、摂食障害の病態を通して「身体をなくす」という理想を描いた「どこにもない場所」を、それが下敷きとしたビンスワンガーのエレン・ウェスト症例との比較から読み解き、それが女性性の受容＝摂食障害の治癒とするような精神医学の言説のパロディとなりえていることを指摘した。倉橋は、「子供がぶたれる」幻想を直接的には描いていないが、この作品には、期待される受動性を能動的に演じることで女性性をパロディ化するという、「子供がぶたれる」幻想と共通の構造が戦略的に用いられている。

また、主人公の痩せ願望は文学的創造と併行するものとして描かれており、「痩せればすべてが変わる」という摂食障害に特有な認知が作中で推し進められることは、医学的言説でも社会的言説でもない文学の領域の樹立が追求されていることとパラレルであると考えた。「女が書くこと」は倉橋の初期作品に共通するテーマであり、そこで女のエクリチュールは、内なる男性性への同一化を通じての営みとして表現される。こうした初期作品にみられる「身体をなくす」という理想や男性性への同一化という幻想の領域は、後の、保守的女性像を描いた作品にも形を変えて保持されていると考えた。

第 6 章では、河野多恵子の作品を取りあげた。河野の「幼児狩り」は、まさに「子供がぶたれる」夢想に浸る女性マゾヒストを主人公とする。これに言及した Jones、長池の先行研究を参照し、この幻想が作中で、幻想する主体の流動性や欲望の多義性を担保しており、主人公のマゾヒズムを単なる受動性に帰されるものではないことを示す役割を果たしていることを見た。この構造は生殖をテーマに据えた後の作品「臺に載る」「蟻たかる」にも引き継がれ、一見自然な受動性の受容と見える生殖の受容の過程に、主体の流動性や自己充足的性質をもつ逸脱的な幻想が働くさまが描かれる。こうしたマゾヒズムにおける主体性を描く一方で、河野は、マゾヒズムと戦争の関係という、幻想に対する現実的暴力の侵襲をも描いている。「幼児狩り」における少年に表象される幻想の領域は、そうした侵襲から免れた幻想の純粋性の象徴と考えられる。フロイトも、「子供がぶたれる」空想が現実の暴力の再演ではないことを示唆しており、幻想の、外傷を再構成する治癒的性質が指摘される。

以上のように「子供がぶたれる」幻想は、幻想自体が能動的な作品創出を促すという形（第 1 部）、あるいは女性性に関する戦略的な表現を支えるという形（第 3 部）で、女性の創造性と深い関連をもっており、幻想の領域が優位となった 1960-70 年代の日本女性文学の一端を担って、女性性に関する多様な表現を可能とし、時にフェミニズム思想とも響き合いながら、後の文学・サブカルチャーの多様な表現につながっていった。